

# 「越境する」生き方

## 宇都宮大学生国際連携 シンポジウム2016

国・文化・言語を越えて

グローバル化が進む現在、「越境」は誰にでも身近な現実となっている、その機会を人はどうやって見つけ、「越境」の決断を下すのか。そして、「越境」することの意味・可能性・課題は何か。

2016年

日時

12月12日(月)

13:00⇒16:00まで

会場

宇都宮大学 **峰**  
キャンパス

大学会館2階 多目的ホール

13:00～13:10 …… はじめに  
(あいさつ：学長 石田朋靖)

13:10～14:20 …… 第1部 基調講演

●多嘉山アントニオ(晏斗仁男)

●小波津ホセ

ペルー日系人協会日本語普及部コーディネーター

宇都宮大学国際学研究科博士後期課程1年

「ペルーにおける日本語教育に携わって」

「まっすぐでない生き方～過去の分岐点」

14:20～14:30 …… 休憩

14:30～15:15 …… 第2部 越境体験 ～学生による体験型ワークショップ～

15:15～15:55 …… 質疑

15:55～16:00 …… おわりに

主催 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

## 講師紹介

### 多嘉山アントニオ(晏斗仁男)

ペルー日系人協会  
日本語普及部コーディネーター

ペルー出身。小中等教育を終え、1997年に来日。日本では、日本企業に就業しながら日本語を独学で習い、2012年帰国。日本に来た当初、「有難う」という言葉しか分からなかった私は、現在、ペルー日系人協会において日本語普及部門を統括する立場として、リマをはじめペルー全国の日本語教育機関を訪問。また、日本で得た経験・知識により、ペルー社会貢献できるよう、日本語教師としても活動。

### 小波津 ホセ

宇都宮大学国際学研究科博士後期課程1年

親の意志によって初めての越境は8歳で、日本で教育を受けながら13年間育った。専門学校卒業後、自分の意志でペルーへの帰国を決断し、社会的経験・問題意識を深め27歳の時に3度目の移動を果たす。移動する度に「自分とは?」と問いかける一方で、社会に対して同化・反発する道を歩んでくることによって自分の将来展望を構築してきた。

### スエヨシ アナ

宇都宮大学国際学部 准教授  
多文化公共圏センター員

ペルー北部のチクラヨ出身で、リマ市バシフィコ大学経済学部を卒業後、同大学の研究所、国連開発計画(UNDP)、ペルーの財務省での職歴がある。1997年筑波大学国際政治経済研究科修士課程に進学のため、初来日した。2006年に宇都宮大学国際学部赴任、主にラテンアメリカとスペイン語の授業を教えている。

## 実行委員紹介

### オルティスゆみこ 国際学部国際社会学科4年

私は、日本生まれのペルー人です。親(家庭)とは違う国・文化・言語の中で生活する難しさを感じることや日本社会でどう生きていくか考えることが多いです。国と国をまたぎ違う文化の中で生活する人が多くなる中で、「越境する生き方」とはなにか皆さんとより考えていきたいと思いました。

### 森島 光太郎 国際学部国際社会学科1年

2011年から2015年まで4年間ペルーに住んでいました。実際にペルーに住んで、ペルーと日本には深い繋がりがあったことに気づかされました。みなさんにもぜひペルーやブラジルについて知っていただきたく思い、このシンポジウムに参加させていただくことにしました。

### 飯島 彩 国際学部国際文化学科4年

スペイン語とその文化圏に興味を持ち、1年間のペルー留学を経験した。沢山ある“越境”の内の一つの形を経験した身として、南米と日本の繋がりについて考えたいと思い参加しました。

### デオリヴェイラ ジェニフェ タニグチ 国際学部国際社会学科1年

自分の経験や、生き立ちと関係する企画だと思ったので参加しよう決めました。このシンポジウムが、これからの自分のキャリアの考え方を変わってくれと考えています。

### 佐藤 乃巴桂 国際学部国際社会学科4年

私の家族がブラジルに移民し、日本に戻って来たことから『越境すること』に関心を抱いております。『越境』と一口に言っても、人によってそのかたちは多種多様です。『越境する生き方』とはどんなことか。みなさんと一緒に考えていきたいです。

### アギーレ マリエル ナルミ 国際学部国際社会学科1年

自分のルーツであるペルー、南米に目を向けることで、向き合うきっかけになるのではないかと考え、シンポジウムに参加することを決めました。自分の中で、また新しい視点が養えることができると考えています。

### 木下 レナト 国際学部国際社会学科2年

私は外国籍ではありますが、小学校から大学まで日本で教育を受けてきました。より多くの文化・価値観をもつ人々が国と国を行き来する現代において、このシンポジウムを通して、異なる文化圏で働き、生きるということをみなさんと一緒に考えていけたらと思います。

### 大城 明美 国際学部国際文化学科2年

私は4歳の時に親の出稼ぎに伴ってペルーから来日し、以来日本で生活しています。自分の中に2つの言語・文化があることの楽しさや苦悩などを経験してきた者として、このシンポジウムに参加することで「越境人」にとってのよりよい生き方を探っていきたいと考えています。

お問合せ

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター(船山)

TEL/FAX : 028-649-5196

E-mail : tabunka-c@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp